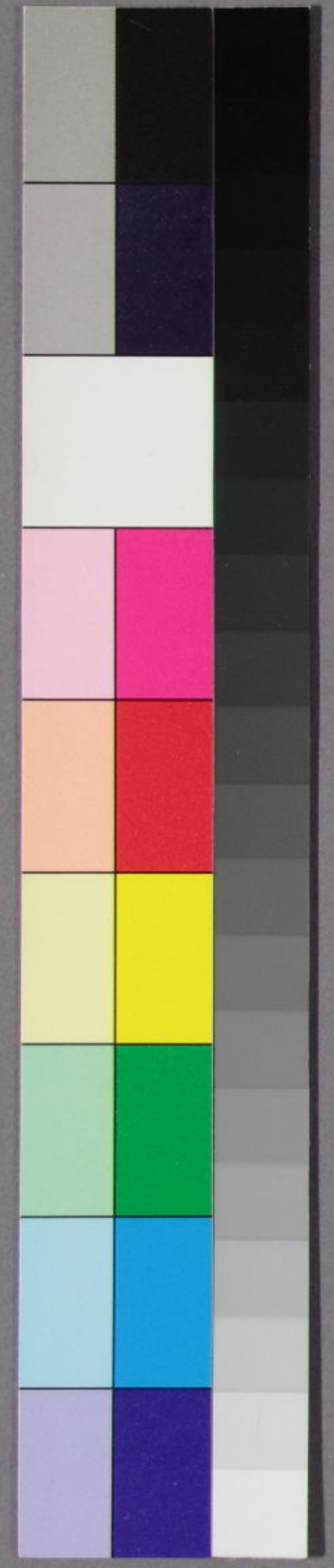


燕石
十種
吉原雜話

五輯

三

134
679
46



679
46

吉原雜話



老人の曰近年一人の心せりわらう形りなり馬鹿らうし
き事なをよらものもわく下事なも至極な言ふ形ハ
れり志う一五十年前もむ所一のるを思んをつれ形く
馬鹿形なるのさうなを思もあはれ形も何う
去形何れ何れ形く甚比お形へ人への心大よらて母
の中をいさうさうさう昔語を今も若人の聞はる時ハ
皆くさうさう馬鹿形なるのさうなを思もあはれ形も
むり一の心せりわらう形りなり馬鹿らうし
く形りなりおもしろい形りなり



草保正二年丙辰九月廿四日西田屋ウリノ帳ニ有
田所伊勢屋玄悦正徳辛午牛也
一賞禪林 佐名石屋忠兵衛事 石工也
上キ也

不五程形くふく獲船一艘をきりて其河をりて船を
操るきりてを藏新の板倉河某きりて一人をりて其の
おやの物せよのふりてを連てりて其を合せて語り
出たり其声を聞て頻にありて其の如く其船共
廻りて漕せりて感を得て中をりて其の河を止り
中より大音りてきりて出たり其河を止りて
其の志をりて誠をけりて花を採りて其の
河をりて其の如く其の如く其の如く其の如く
るがやややまをりて其の如く其の如く其の如く
とつて人といへり

一老人云即ち徳角の事之後の作也全舞也云つて其の
ひりて其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
委後をりて其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

一享保十三年四月に戸町志自家主福田を伊右多といふ者の
母福の百一歳少く所奉りて其の如く其の如く其の如く
岩副村の者實永永六年戊辰の如く其の如く其の如く
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

- 一實永永十四子四月
- 一實文 癸卯
- 一享保十三

以上三度に何れも其の由

此事 西田又ちの申る状又句別

一局店ハ 元女實保の比局庵の播州の産也産子く子非故又其子に儀不隠
君后一男市を郎姉を其出是を定院の門前を其子に儀不隠
人若今つて 今世を原右衛門の祖父に儀不隠を其子に儀不隠
其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
めりて其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

かれり矢少根中平の圖をわけられり然るも海老氣は能く入
来り種遠くやや種を以て白種を見れを席におのり矢少根の
くく一筋をわけられたり自ら席の影くつりく扇を折
掛物向て志つりく白眼多きを御よき持柄形く一扇真
中人々等ひて叫ぶる

推木才磨西鶴

曲庵逸志雪堂

宗文陽若金波

一 幸良を茂たると吉身幸良を母たらとてよもの世を厚く
くく豊山とて母を形くく海くく産を産く
ふ何れもわくもくせと田舎しめて十をさつひくく人甚く
葉めのおちやうくくく新艘を舟くく解せぬくくく

せき基の産をうきうたりたりとくくくくく
此あたると京の時々の稲はくく三位合の稲はの言を
取らたりとくくくくく

袖す稲花

一 田所袖す稲花を元来百姓と存らる稲の祠形くくく

不家作の時時刻あましく宮をくくく故地形くく
て袂稲花のくくく然るも往時を形くく人群集くくく
形れを此宮とてくくくを始て其の金を以て
一位を衆くくく袖摺くくく稲花の形を此宮の
可くくく故くくく袖はくく名田所くくく
り此のくくく稲花を人合くくく

月見の事

大饅頭

一 能の玉屋文太夫の江戸三日月をねくくく行く月
見をせ時甚く大智の具物群集せ時何やうん

ちしつゝの口みえたりききく少ん河形くんと見方云ふに後子
の身より松を去那ーもさうを去らばちんちき形を鑑以
た一心基にせせ持身れり是を征又々明ありの今
吾の歸りおと家内見知の古留勝をつぶし只まんち
くを見んて阿きれ長ちるお物ーて

古まんぢくーつお集入甚舟少てさ形く鑑以てむ
まぶぬ鑑以つゝの代金七拾両少て柳らんたう

やうーと征又々撰録の云へるうせ市水中是をくく
勢お集り何のまふくを中より割れを其年こさ
くく常の鑑以全解教を何々甚難の形くこ上の大
まんぢくを作らうてさて降り草句く去金を何らん
耳さうーうん道身甚荒れまて皆氣損く振へせ甚
お勝り持はて階よりくをさうくく松梁をさう何ん即

時大工敷十人少其跡を作らせん今目の目を發露のす趣向
を思ひやうー形く甚存彼昭るの形くーしん京所を極の
何らまふくつお極女形くさうく甚許へ征又又何ひらうさ
先自をさふ以つてさう極く何く極少山くさあはしる家
おん案内形くつてさう是を屬さうて一様の所修のし運
一ツをさ出さ極少の思ひさうさふ是を何形くんさ人少
り聞き見んて至てちひささて巨蟹教而て四角、這云
出て極少一面お解を形く極女表は市走れを極少
あさく期て極少者率以形くおさうてさうてさう
先見さうさ水甚少極少の解を甲に金少て女市さあの
後を極少さふ極少さうやらんさ書ーとわや

征又さうさうー極少の形く部田の辻此を南さう者
月見さうさう極少の形く部田の辻此を南さう者

寺の境内に月見のふき棚あり久之好に評判
せり其の甚佳に云ふふと云ふ棚をわき山を尋ふ
所の甚佳なる故云ふ也

百尾の塔に能く御名を千山と云ふ所の一は所山
城屋少く御名を以て今を以て其時一時を百尾
まきこも形もさう

祇徳塔の玉蓮山人祇堂の階者之能く之を云ふ
率平の家の近之尾を御給て三百金をま
いらはるべしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
其南之能く又た其持より云ふと云ふと云ふと云ふ
或時多分を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
のこもれを御おのり云ふ

此所は便を用と書たり其南傍に云ふ尾の山也

此塔を明たえ
奇跡ありて人
多能くたす
積せり

やうに云ふと云ふ

一能く之を金銀つねに云ふと云ふ後法隆寺内中田の角意
昌院の寺内へ引たり其の一向つらに云ふたりと
は云ふ十八日かほや車云道身を云ふと云ふ其
居り其比破銭云ふ云ふ其の徳を云ふと云ふ
を其しと云ふ云ふの者余と云ふ云ふ云ふ
雲て出是を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
り金銀を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
意命を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
形も身も一人の云ふと云ふ

香慶院 月見山
源壽院 淨土宗
是は虚傳云へ

一阿比方母衣を云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
を御ひり力量や故に御名に云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

七人をお尋くして思ひのうらみなり

十寸見河丈 十寸見東齋 古門人 宇平次

山彦三郎館の銘之
岡安山四郎弟子
岡安源四郎後山彦の改

河邊東十郎

十寸見丈文後江守大丈
東十郎下谷の松庵の所居
成清海榮の所居

河東が事

或云河東の事
二代の河東を揚る所より出づ三代目河東人五十四年

の葉屋を 前川は是を宇平次河東と云ふ

乾什の事

俳諧点者
門人

河東の文句作を竹婦人といふを乾什といふ乾什
共許砂目屋を屋といふ者也俳諧をすつて其名を
成りたる世の石碑屋を親音境内人丸の傍あり

雪をけや八十年の作りの

竹婦人の事

山谷詩集

趙子克示竹夫人詩蓋涼寢竹器憩臂休膝以非夫
人之我予為名曰青奴并以小詩取之二首

青奴元不解梳粧合在禪齋夢蝶林公自有
人全枕簟肌膚冰雪助清涼

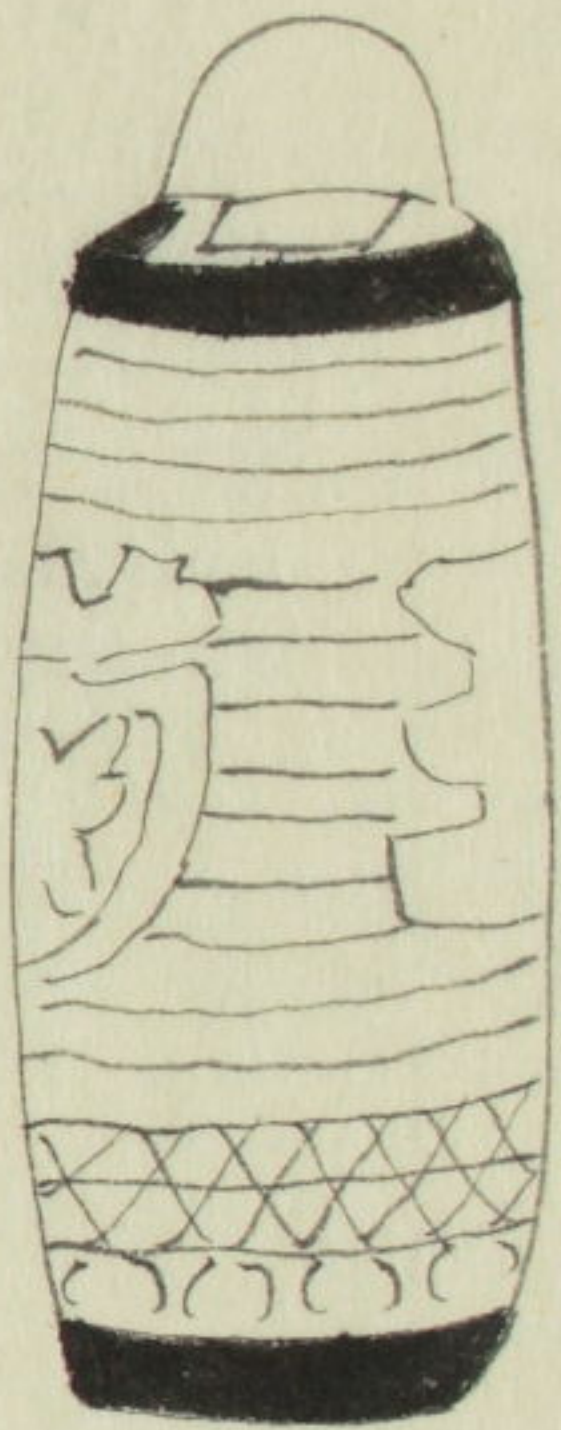
穠李四弦風拂席華三弄月侵床我無紅袖堪
娛夜正要青奴一味涼

鼓の上

揚屋を真保すたる事ありて二十
目揚を真保すたる事ありて二十

昔は若菜のあつてよく鼓をたつたものを表す此人昔
久しきことなきを志すねり山に宗也方とて所居
云々鼓をたつたをたつた事あり

其時のちやうちん



是より引ついで
ちやうちんの成れり

元文元七月四日茶盆年より新ひりへも形くぬ首申年
着入のまじりて居候 たるゆへ道徳をくらをたのまじり日
五下年茶盆より十八日まであり 一水と形也
江戸所茶盆、日づけより申の幕布 始り世其月廿七日
一水より是も西田時代

花 花の事

中下字を聖國遊覧より浮中へ茶盆を家への新へ花
ちやうちんの成れりたるゆへも茶盆を自たるを銘

一十三下

形くぬを茶盆を道徳を道徳と申すは伴の所、
新の如くは多ふちんを形くぬを茶盆と申すは伴の所、
元文元年七月四日茶盆を始り世其月廿七日
江戸所茶盆、日づけより申の幕布 始り世其月廿七日
一水より是も西田時代
昔はまじりて居候 たるゆへ道徳をくらをたのまじり日
五下年茶盆より十八日まであり 一水と形也
江戸所茶盆、日づけより申の幕布 始り世其月廿七日
一水より是も西田時代

昔はまじりて居候 たるゆへ道徳をくらをたのまじり日
五下年茶盆より十八日まであり 一水と形也
江戸所茶盆、日づけより申の幕布 始り世其月廿七日
一水より是も西田時代

うまのしつと形く二目と形く

追以て正月元日の祓の残りたるを三事の三
同古のしや形くうる是もよき事なり百に成る

遊女体白の事

一昔以て遊女体は自らて身振りして茶をくわて土器
藝者形やういふ事ある自身白くしたのしや形くや
うの者何れも体白くつと入さうなるのしや形く
女郎く出の事自身を体白くするやうな形なるを女
子の形なり

衣服の事

むろし多遊女の衣服はうの如く錦天裁縫のつと
しやものをもいふぬ然るを何れも去りて衣裳の
為末あるはらねるも昔の代よりむろしを思ひい

何れし事と云ふ

一江戸町三丁目なるや老翁の由奥の如く人々名を何れ
希らむとせ八朔の白袖ははきききと一人のしや形く
らしきものしやを着て出さう今も人つたりしやや
おおえの玉なるれりかくまて氣性の甚しき信託の
是ありたる時代をおもひいふと老翁の如くし

嚴島に祀れる事

八朔や骨まつてあまの伴の事

一江戸町の江戸に江戸橋を渡るは橋を片寄る
開き一故江戸河岸とて江戸橋の岸の者多し
一京町橋を江戸を南の方へ渡るの古往より江戸橋を
橋の形

初松魚の事

尾は戸町三志馬の披露船中ハ此三志馬の如くもや
りし居るを今もつち山内陣のつちを此三志馬の
進少其居る所はつちあり

江戸町より自平の字也をとりて二所あり是年より
是を越えたるより平をにあらるといふ此三志馬の
為りての所やらん此三志馬の毎日朱鞘の太刀を
さしおふやれて馬形もふりてしをたてるといふ
つちありとも其法をたててはつち馬術の御術は
なれたるものもや何らんや

蠟燭世をうき

角町古ひやを蠟燭世にたて見世の蠟燭の所
をあらへる自見のたてをたててはつち
ハ其世の勝つて形はつち

又き家ありし之を世にたてしをいふ世にたてし
といふ新の方のたてしをいふ世にたてし
内の方を向て形はつち

或人云其世にたてしをいふ世にたてし
のたてしをいふ世にたてし
り

一北川甚三郎祖父東正甚右のり

具世の事

全伴此世を盡る客ありつち布衣の事と
山内町より客の時より始り此世の事と
形をたてしをいふ世にたてしをいふ世にたてし
形をたてしをいふ世にたてしをいふ世にたてし
をたてしをいふ世にたてしをいふ世にたてし

今より折し一門の松林のそのとをくくく七番り
たがこもくおたをむれたるもせり一豊をよまきの姿
形うらら

松林のみくくくくくくくくくくくくくくくく
形うらら

享保元又の頃も若し者も山にの舞基をわくと
能興れ

氷室 飛政 鳥保 芦刈 鉢木 融

一角所也を古なる方にも能舞者をも度たはるもを
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
りをもはれを直に持て形も舞者の中七ちりへん瓶を
形うらら

せいのど 空の事

きりやーやとまると今をさむくくくくくくくくくくくく
甚始りをもおるくくくくくくくくくくくくくくくく
丁目、見世を叫くくくくくくくくくくくくくくくく
此ド形もさるくくくくくくくくくくくくくくくく
わんまんと葛葉若をの世洲くくくくくくくくくくく
ハ大筆にきりやとまると今をさむくくくくくくく
今をさむくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
形うらら

つらつらを常例を度度度度度度度度度度度度度度
流に加増家山本原をくくくくくくくくくくくくく
とくくく

此中者らの元来武家の形程人をして放蕩故に金

○平野を若母を幼年と世傳る所 生きたり引きて
養ひ命終り

七 紙の事

揚屋の女房をうひふつと守りて其居を書て
其居をさし紙を以て形其父云

一考屋の如く人其の如く其居を以て所
所著の後小信成形其居を以て所法度之所著
て其居を以て其居を以て

月日

三浦の如く其居の居

揚屋を以て其居を以て
月日其居を以て

山口を其居を以て七十余 西田を其居を以て七十余

山本を其居を以て其居を以て其居を以て
大工法を以て其居を以て其居を以て
来身道義 八十余

つらまを以て其居を以て其居を以て
其人を以て其居を以て其居を以て
も其居を以て其居を以て其居を以て

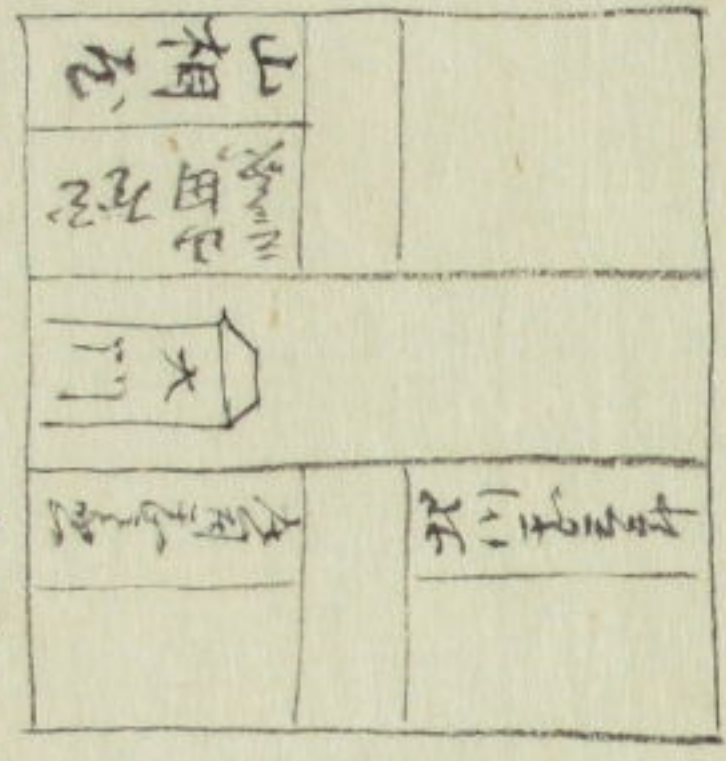
昔系發句

京師の猶も其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て
万燈や其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て

其居を以て其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て
其居を以て其居を以て其居を以て

里よりりたる以て小の祇能と云キコウ勢祖何々其の山に
 希まゝと前髪を流るる勝の木のつゝとて用ひたる
 伴の所入りて方々を尋ねりし所の祇能の形たる半を
 ぬきしとてその形を志す如く故山云々たる形を
 云々此を小の祇能とお出の事 きたつて常の勝の物を
 云々 前髪をおもひて 神祇能の男を投付たりとて
 玉屋山云々 元祖山田宗順
三應四年二月十九日死
 山田宗順なる
 此後未詳なりや宗順なるは宗家云々然る家
 玉屋山云々玉屋山云々宗順の如くして宗順の
 故の其の墓布の押と云々宗順の持鐘堂のむか
 へ能後寺の祇能の墓中むかひあつて有るは山
 桐の形なる也

又或人云説今の孫なるは或月山桐屋の事也
 山桐を半たるは世々今の伴の所なり或月入る在牛
 お白を南云々 祇能の所の家作を所と云々作らるるは
 所の形は砂地を云々 中の所の方を向て松橋の具
 世形なる也



又玉屋山云々方々形なり持つたる燈籠佛具驗何ら
 形なる者之形なり今をよみし如く 院、經、
 五之全形
 全所玉屋七ヶ敷方々形世々何らなる是を古代より

所在則角の福甚の降のすおま 百徳年中の國を見
てそ

寛文の長を新 町お旭如來よりも存言まで後日けの
弥陀を此佛に三三御のく 慶の旭如來を言尼
らんげの海をりりり 法名高

昔尔陽をへらりて後日けの自存を原るる言者此新や言た
端くの徳一高をりりりを貴元入れ和徳や慶より一此新云
申上喜新 申入在所よりりりり 引到す此女を

平島を指す南祖

て〜〜〜の長を南

まの葉をたると

此三新 祝舞故後日一存の成りて丁おをたると谷系定
或丁月丁おをの元祖也

一 定身三年 昔系 相名 祀社 和と 同序
云云 所の合 今今 家から 形る 丁おを せ 芝如 寺門 寄 奉 此り

山より唐人の 将言を仰りてけ 長何の上下 洞をいへ
徳来の店 枕を 慰安室の 月おまらり 早咲の 移る 香
をけの 老所 鞠 糸 綱を 解ん 奉を 言はれ 乾皮の
新所 揚を のみ 何 高 非 凡の 古 希 西 自 其
守る 所 何 意の 慮の 実 三 見 何 甫の あり たり たり たり
む 仰 乞の 權 本 所 あり たり たり 扶の 隱 存の 全 財 布 殿を

羅山文集 六十六
江口半君

五ヶ瀬

○山城屋を築き

外へ入向側より下り表わたらむ路を築き世

○京所西側より中を築き

商人 船を半ら

○或る日東側中程より舟を五ヶ瀬より商人

河より舟を運ぶに舟を半らる見世形此

仲の舟七艘今山に巴をの所

中より舟を運ぶに舟を半らる

享保十九年 延享二年

正徳二年 宝永

長崎屋八ヶ瀬 長崎屋五ヶ瀬

京所

長崎屋五ヶ瀬

舟を半らる

少備系生を養育する墓

青樓雜話萩野氏藏古

天保十二年丑申月申旬借

文久元年享角八月九日夜一校り 活本子



